

## 2 1 世紀の日本のかたち（2 3）

### 都市化の未来（The Future of Urbanization）

-- 世界居住学会 トルコ（アンタルヤ）集会報告 --



戸沼幸市  
〈(財)日本開発構想研究所 理事長〉

#### 1. トルコの印象

今年の世界居住学会（The World Society for Ekistics（WSE:世界エキステクス学会））の集会が、この10月20～27日、現会長 R.ケレスさんらトルコ側の大きな努力によって、トルコの地中海に面した古都アンタルヤで開催され、私もこれに参加してきました。

トルコへは成田空港からほぼ12時間、イスタンブールのアタチュルク国際空港へ、国内線に乗り継ぎ2時間ほどでアンタルヤに着きました。集会は海岸に面したリゾートホテルの会場を借りて、期間中カンヅメになって18か国の参加者が主題、「都市化の未来（The Future of Urbanization - Megalopolis and Beyond: Networking, education and

interdisciplinarity）」を巡って議論しました。

アンタルヤはトルコ有数のビーチリゾートとのことですが、ギリシャ、ローマ時代の遺跡や古くからの港町が残っており、議論の息抜きにあちこちと散策を楽しみました。



アンタルアの風景 (TURKEYLIVE.NET より)



トルコと日本の位置関係 (参照: YAHOO 地図)

市営のアンタルヤ考古学博物館にはアフロディテの頭像、ベルゲの12神像など、エーゲ海文明の生んだ一級品がずらりと並べられておりました。

一夜、空に三日月の懸かる庭で、州ガバナーの招待の宴があり、地元の方々とも交歓しました。

アンタルヤの集会の後、私はアヤソフィア、ブルーモスクのイスタンブールに2日ほど滞在し、34年ぶりに訪れて、このオリエントの世界都市の変貌、近代化ぶり、それでいてその割れ目から吹き出してくる地べたからの熱風の強い圧を感じたことでした。多民族、多宗教・文化が高密度に生々しく渦巻いているのです。なにしろイスタンブールは遠い昔から東方アジアからの人・モノ・カネ・情報・文化を運ぶシルクロードの終着空間であり、これらをヨーロッパに中継する都市でした。1883年生まれのかのオリエント急行は今年で中止とは残念ですが、2世紀を跨いで多くのヨーロッパ人を運んだロマンの終着駅でした。ヨーロッパはここでアジアに出会うのです。ボスポラス海峡の港の市場は歴史を呑み込んで活況を呈し、今も大変な人混みです。

トルコの横長の地理地形はそのままヨーロッパとアジアの架け橋、ヨコ軸です。では、これにクロスするタテ軸はないのか、と地元の人に聞いたところ、イスタンブールには北のロシアと南のアラブの人びとをつなぐタテ軸もあるよと教えてくれました。イスタンブールには縦にも横にも斜めにもいろいろな交叉軸があるのでしょうか。

トルコ共和国がEUに入るかどうかというのが一つの議論になっているようです。キリスト教文明圏にイスラムの国が入ることができるのかは大いに注目されるようです。トルコの友人は、イスラム教は排他的ではなく「愛と寛容」の宗教なのだと言っておりました。来年はトルコの日本年とかで、トルコの人びとは日本には特に親近感を持ってい

るようです。

私の乗ったトルコ航空は、行きも帰りも日本人の観光客で一杯でした。

## 2. 都市化の未来 —ネットワーク都市

WSEフォーラムでは次の3つのテーマについて議論がなされました。

- ・メガロポリス
- ・ネットワーク
- ・人間居住の学際的研究方法と教育

メガロポリスについてはまずアメリカのケース—シカゴ、デトロイト、ピッツバーグなどを含むミシガン五湖メガロポリスについて、デトロイトが落ち込んでいるという報告がアメリカ側からありました。日本側からは長島キャサリンさんと土井崇さんが東海道メガロポリスの実態と生態的リフォームについて見解を述べてくれました。

ただ私の感想としては、東京、名古屋、大阪と地続きのメガロポリス論もあるけれど、東京、ソウル、上海のように、国境を越えてメガシティ相互が1～2時間の距離で行き来でき、高いモビリティで人やモノが移動している21世紀型のメガロポリスが生まれているとコメントしてみました。

このことはヨーロッパの世界都市間、ロンドン・パリ・ベルリン・ローマなどでも起きています。21世紀のネットワーク都市、世界都市ネットワークの時代に入りつつあるといえます。

ネットワークについては、私も報告者の一人となり、「ネットワーク社会の構造と信頼性について」(「UEDレポート 2009 春号」掲載論文)を英語にして発表しました。情報革命と交通発達によってもたらされつつあるネットワーク社会を、家、コミュニティスケール、村・都市スケール、地方圏スケール、国スケール、国連合スケール、地球スケールに区分しつつ、新しいネットワーク社会

の光と陰について論じてみました。

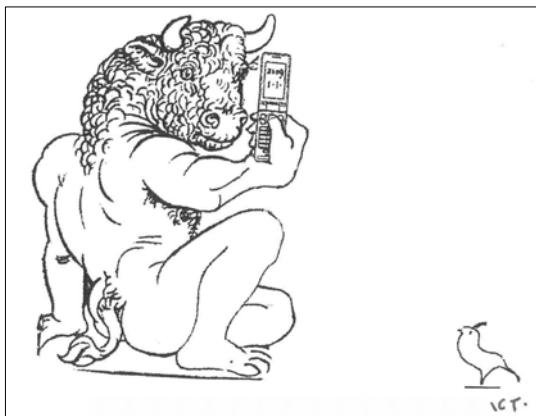
日本の例について、短絡するネットワークによって引き起こされている振込め詐欺や、顔の見えない人と人とのネットワーキングによって起こされる殺人事件、バーチャルとリアルの交叉による本物の見失い、パソコンネットワークの入り込みによる家族の解体などをとりあげてみました。アメリカ、リーマンショックとグローバルネットワーク経済についても言及しました。しかし、トルコなどのイスラム社会では信仰に基づく伝統的な家族が強固にあり、日本や欧米と事情が異なるという印象でした。ただグローバルに広がるネットワーク社会の不安（定）は、いずれの国にも生じている様子でした。

情報、交通の重層した現代のネットワーク空間の様相をどう読み解くかは、人間居住、都市・地域計画、国土計画等にとっても中心的な課題となりました。

ネットワーク（動網）、モビリティ（動度）、シエル（結節空間）をキーワードに、地球の人間居住に新しい理論の組み立てが求められていると考えます。

これは人間居住の学際的研究方法と教育にも深く関わることで、WSEとしては自らの国際ネットワークを活用しつつ若手を入れてこの問題に取り組むことになりました。

### ケイタイを持った21世紀ミノタウルス



### 3. 地球の心配屋

今度の私たちのフォーラムでも地球温暖化問題が繰り返し話題になりました。特に、元祖生態的都市計画を自認しているドイツは、ソーラーハウスづくり、水と緑の都市づくりの事例を熱心に報告してくれました。

クルマ社会の見直しについても一議論あり、長島孝一さんも加わってエコカーや自転車の利用を熱心に説く会員もおりました。京都議定書以来、先の鳩山総理のCO<sub>2</sub> 90年比25%減の宣言と、日本のこの問題に対する取り組みについては皆知っており、これに注目しています。

WSE、世界居住学会はもともと地球の心配屋の集まりです。テロ、核問題、地球の貧困問題に直面しつつ、持続可能な地球の人間居住をどの様に築くことが出来るのか、全く大きな問題を抱えた学会です。

EKISTICS（ギリシャ語のオイコスー“住まう”の意からの造語）学会の創設者のギリシャ人、D.C. ドクシアデスは、1976年、バンクーバーでの「国連人間居住会議」通称 HABITAT の立ち上げを中心的に推進した人でした。この立ち上げの直前、癌で亡くなったのですが、生前、ギリシャはデルフィの神殿に、地球の未来はデストピアかユートピアかと問いを立てていた姿が目につかびます。

地球人口が60億人、100億人、200億人になったときに地球の容量はどうなるのか、不可避免的に国境を越える人口移動による国、民族の紛争を避ける方法があるのか。70年代、80年代、ローマクラブとともに地球の人口増に警鐘を鳴らしてきました。このためにA.トインビー、磯村英一先生などと世界に呼びかけて国際的学際的学会をつくったのでした。

私はこの学会がアメリカでも先進ヨーロッパでもなく、ギリシャに本部があることが気に入って、

ギリシャに滞在していた縁もあり、75年以來この学会の会員になっています。日本からは、長島孝一、キャサリン夫妻、土井崇さんが私よりも古い会員で、最近、後藤春彦、関口信行両君が若手で加わっています。皆手弁当の会員です。再来年

(2011) はインドのボンベイでWSEの会を開くことを決めました。インドの地から改めて地球と日本などを見渡してみたいと思っているところです。

(2009. 11. 15)